

**416年** 遠飛鳥宮付近（明日香村）で地震

日本の記録の中で一番古いものは、日本書紀に記された西暦416年に起きた地震です。たんに遠飛鳥宮付近で地震が起きたという記録だけで、被害の記述はありません。なお、昔の人は地震のことを「なるふる」とも、「なる」ともいっていました。「な」は土地のこと、「る」は「居（るところ）」であり、「なる」で土地を表す古語になります。その「なる」が「震える」、すなわち「なるふる」だと地震ということになります。たんに「なる」だけで地震のことを指すこともあります。日本地震学会の広報誌の名が「なるふる」なのは、こうしたことによっているのです。

**553年** 阿蘇山の噴火

一方火山噴火の一番古い記述は阿蘇山の553年です。ただ本当に553年かどうかは微妙なところもあります。この辺の年代で噴火があったということでしょう。阿蘇の噴火記録はこれ以後すべて、中岳からの噴火（噴煙を上げ、噴石を飛ばし、火山灰を降らせるストロンボリ式噴火）であり、溶岩が流出した記録はありません。

**599年** 大和地方で地震 M7.0

被害の記述がはっきりする地震は、最古の記録よりも180年以上もあと（この間の地震の記録はありません）、599年に大和地方を揺らしたマグニチュード（以後Mと書きます）7.0という地震で、建物の倒壊の報告があります。M7クラスの地震は内陸では最大クラスの地震なので、当然人的被害も出ていると思われませんがその記述はありません。

なお、地震計ができる前の震央の位置やマグニチュードは、揺れの報告や被害の状況から推定するしかないのです、それほど信頼できるも

のではありません。

**630年** 焼岳噴火**645年** 大化の改新。**679年** 筑紫で地震 M6.5～7.5 地割れあり。**684年** 土佐、東海、南海、西海で地震（白鳳地震）  
M $\approx$ 8 1/4 最初の巨大地震記録。

土佐（高知）を中心に、東海（静岡、愛知、三重）から南海（和歌山から四国の太平洋側）、西海（九州の太平洋側）までを揺らしたこの地震は、M8 1/4と推定されています。これが記録に残る最初の巨大地震となります。被害の地域から、南海トラフで起きたものだと考えられます。翌年（685年）に焼岳（北アルプス）、浅間山が噴火していますが、この地震との関連はないでしょう。

相模トラフから南海トラフで起こる地震については、ある程度の周期性・規則性があるようですが、これについては81ページや175ページで改めて述べることにします。

**685年** 焼岳噴火  
浅間山噴火**708年**  
～15年 鳥海山噴火**710年** 平城京に遷都（奈良時代始まる）。

## 715年 遠江（静岡県西部）で地震 M6.5～7.5 山崩れを起こした地震。

<sup>とおとうみ</sup>遠江（静岡県西部、北緯 35.1°、東経 137.8°）で起きたこの地震は、天竜川で山崩れを起こし、天竜川をせき止めて水をためたという地震です。この自然にできたダム湖は数十日後に決壊し、下流を水没させています。民家の被害状況は残っていますが、たぶんあったであろう人的被害の報告はありません。日本では、地震、あるいは火山噴火に伴い川がせき止められ、のちにそれが決壊して下流に大洪水を引き起こす災害は、この後も何回も起きています。その中で1783年の浅間山の噴火（91ページ）、1847年の善光寺地震（102ページ）の例についてはそれぞれの項目を参照してください。

742年 霧島山噴火

745年 美濃で地震 M≒7.9

762年 美濃・飛騨・信濃で地震 為政者による救済措置。

764年 桜島噴火 鍋山形成、溶岩流出。

773年 蔵王噴火

781年 富士山噴火

788年 霧島山（高千穂お鉢）噴火

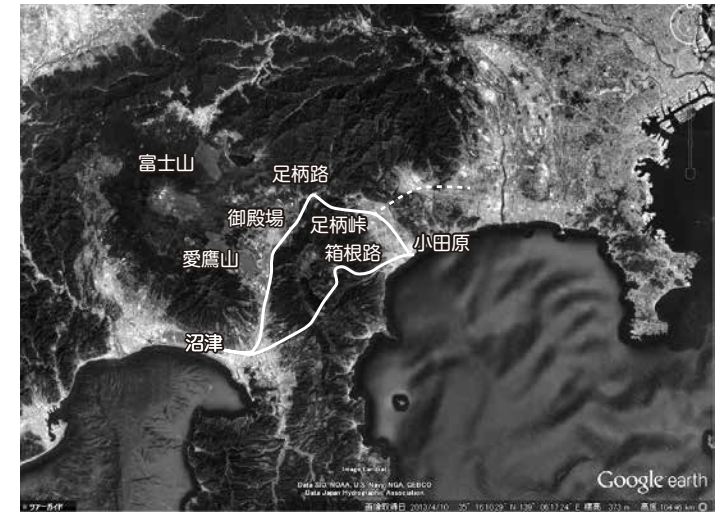
794年 平安京に遷都（平安時代始まる）。

## 800年 富士山噴火（延暦の噴火） 東海道閉鎖。

<sup>えんりやく</sup>延暦の噴火は、富士山の東斜面（西小富士）と北斜面（天神山－伊賀殿山）の割れ目噴火だったらしく、頂上火口からの噴火はたぶんな

かったと思われています。噴火の規模もかつて考えられていたほど大きなものではなかったらしいこともわかってきました。

古文書（『日本紀略』）では、噴火時の爆発音も報告され、また火映（火口上空の雲や噴煙が、火口内の赤熱した溶岩の明かりで赤く映える現象）も見られたようです（『日本後紀』）。この噴火では火山灰・火山礫が大量に放出され、昼でも暗くなるほどだったといわれています。またこの噴火で火山灰が大量に降り積もったため、東海道の足柄路が使えなくなったとも伝わっています。しかし、この噴火による分厚い火山灰の層も見つかってはいません。また北側に溶岩が流れて被害も出たらしいともいわれていますが、これもはっきりとはしていません。ようするに古い時代の噴火で、また都（京都）からも離れた地なので、記録が断片的で全体像が掴みにくい噴火です。



足柄路と箱根路。

©Google

ともかく、この噴火による降灰のために一時閉鎖された足柄路に代わり、関東に通じる街道として新たに箱根路（現在の国道1号沿いの旧街道）が切り拓かれることになりました。足柄路は矢倉沢往還ともいわれ、金太郎伝説のある足柄峠を超えて御殿場に抜けるルートです。

この御殿場側が火山灰に埋まってしまったのです。足柄路は翌年には復旧しますが、急坂ではあるが距離の短い箱根路の方がメインルートとなり、足柄路はサブルートとなってしまいました。

万葉の時代から富士山の噴煙のことは詠まれているので、山頂からの噴火はなくても、噴気活動はそれまでもあったようです。高橋虫麻呂の長歌には「……富士の高嶺は天雲もい行きはばかり飛ぶ鳥も飛びものぼらず燃ゆる火を雪もち消ち降る雪を火もち消ちつつ……」とあり、明らかに山頂での活動の様子だと思われます。ただ、残念ながら虫麻呂自身の生没年が不明なので、正確な年代はよくわかりません。

806年 磐梯山噴火

810年  
~23年 鳥海山噴火

818年 関東で地震 M7.5以上

822年 伊豆大島噴火

826年 富士山噴火

830年 出羽で地震 M7.0 ~ 7.5 犠牲者15人。  
鳥海山噴火

832年 三宅島噴火

838年  
~86年 伊豆大島噴火

838年 神津島噴火 天上山形成。

850年 出羽で地震 M7.0 ~ 7.5 犠牲者多数。

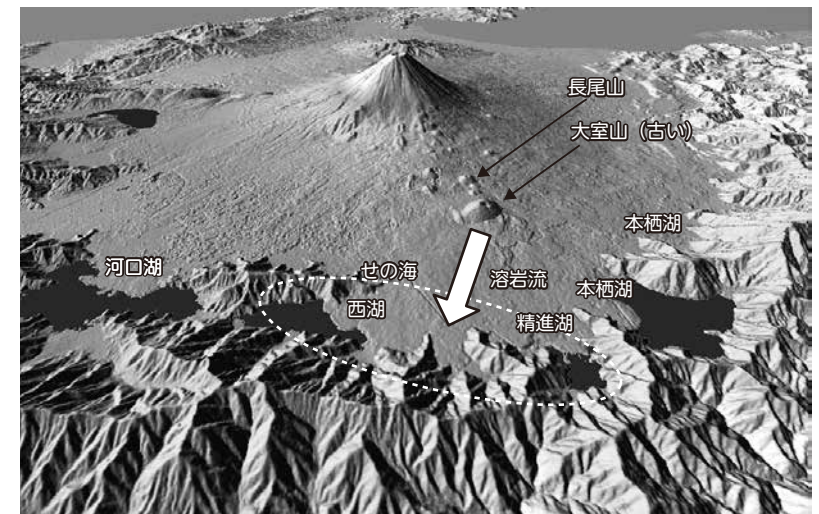
863年 越中・越後で地震 民家破壊多く圧死多数。

864年  
~66年

## 富士山噴火（貞観の噴火） 富士山最大の噴火記録。

記録に残る中では宝永の噴火と並ぶ、富士山の最大クラスの噴火です。延暦の噴火と同じく山頂からの噴火ではなく、西北斜面にいくつもの噴火口（側火山）が開き、そこから大量の溶岩が流れ出たというタイプの噴火です。このときの最大噴火口が火砕丘の長尾山であり、このときの溶岩流を長尾丸尾（“丸尾”はこの地域で比較的新しい溶岩流を指す言葉）といいます。噴火口全体では、「下り山火口」と「石塚火口」をむすぶ火口列と、「長尾山」と「氷穴火口列」をむすぶ2つの火口列が開き、2つの火口列をあわせた火口列の全体の長さは約5700mにも達します。

このころ、富士山の北側には“せの海（割の海）”と呼ばれていた大きな湖がありました。貞観の噴火で流れ出た溶岩はまず本栖湖に向かい、さらにせの海に向かい、河口湖にも向かいました。せの海はこの溶岩流でほとんど埋まってしまいましたが、かろうじて残ったのが



富士山の北斜面。陸域観測技術衛星だいち（JAXA）のデータをもとに、カシミール3Dで作成。